

<子育て日記>

★10年間の実験 ー幼児期の記憶はどのくらい残るのかー

1987年春

夫は、娘を東京ディズニーランドに連れて行ってやりたいと言う。(本当は自分が行きたいらしい。ディズニーは子どものときからのあこがれの人で、そのディズニーが考え出した夢の国ディズニーランドに行ってみたいのだが、いい年の大人が一人で行くのは恥ずかしいので、娘をダシにして行く魂胆だ。)

娘はまだ2歳。乗れるアトラクションもまだ数えるほどだし、こんなに小さいときに連れて行っても覚えてやしない、と言って私は夫をあきらめさせる。「だって私は、そんな小さいときの記憶は全くない。公園の池で父がボート漕ぎを覚えてくれたとき、オールが水の上をすべってしまい殆ど進まなかったことだけ覚えている。その公園にどうやっていったのか、電車か？バスか？ 母も一緒だったのか？お弁当は食べたのか？何も覚えていない。小学校1年ぐらいの時だってこんなものよ。せっかくディズニーランドにつれていっても、何も覚えていないんじゃ悲しいじゃないの。」

しかし、ではいくつになればいいのか。楽しかった経験を思い出として残せるのはどのくらいからなのだろうか。子どもの時の記憶というものはどのくらい残るのだろうか。また、どういう記憶が残るものなのか。答えられない私。

1987年秋

娘2歳半。それまで住んでいた鷺宮のアパートから引越して、同じ区内の私の実家に住むことになった。かおるは、それまで毎日遊んでいた近所の6、7人の仲良しの友だちとお別れをしなければならなかった。新しい住まいとなった私の実家の近所には、あいにく娘と同じ年頃の友達がいなかった。家の前の細い道は、近くの幹線道路への抜け道となっていて、危なくて遊べなかった。必然的に家の中での遊びが増える。

一週間ほどたったころ。写真を整理してアルバムをつくる私の隣で、娘は写真をみながら仲よしだった鷺宮のお友達の話をする。



「トックんに、アキラくんに、オオノくんに、し〜ちゃん・・・」
かおるはどこかな？「ここ(黄色の服)」
真ん中の子は？「トックんのお友だち」
こっちは？「しいちゃんとももちゃん」
何してんの？「お話ししてんの」

自転車練習してるの？「うん」
誰の自転車？「アキラくんの」
貸してくれたの？

「うん、乗っていいって」
アキラくん、かおるの三輪車に乗ってるね



「うん」うしろ押してくれてるのは？

「ターちゃん」

そのうちに、写真にないことも話し出す。

「ガレージセールやったね」そうだね～。トックんのおうちのガレージでね。

「ガレージセールのあとで、ラーメン食べたね」うん。かおる、いっぱい食べたね。

「おいしかったね」みんなで食べたからね。楽しかったね。

自分の宝もの箱から、プラスチックでできたカラフルなうでわを持ってきて、大事そうに言う。

「さよならしたとき、ターちゃんがくれたんだよ」かわいい色ね。「キラキラしてきれい」

なるほど、写真を見るといろいろ思い出すのだ。話をしているうちに、関連した記憶も引き出される。

この方法なら、2歳のときの記憶を残せるかもしれない。私は実験してみることにした。

毎週1回はアルバムを見て、鷺宮のことを話すようにした。

私が覚えていることも話し、思い出のひとつを一緒に楽しんだ。

10年後

年がたつにつれ、アルバムをひらく回数は減った。週1が月1になる。私も仕事に復帰したし、娘も学校やら友だちづきあいで忙しくなってきた。それでも折々にはアルバムを見て、成長の年月を省みながら、写真の説明を娘に話させるようにしてみた。10年のときが経っても、娘は写真を見ると一緒に遊んだ子どもたちの名前が言えた。そして、いろいろな出来事を思い出した。「ターちゃんにキラキラした腕輪もらった」「ガレージセールの後で食べたラーメンおいしかった」腕輪も、ラーメンも写真には写っていないが覚えているのだ。嬉しかった経験、おいしかった記憶、ちゃんと残っている。

そしてさらに時がたち・・・

中学高校と進むと娘は部活動で忙しくなった。土日はほとんど家にいない。アルバムを見せる暇もなくなり、実験は途絶えた。そうしてまた10年が過ぎた。アルバムを整理していた折、ちょうど居合わせた娘に久しぶりにアルバムを見せた。「覚えている？」

「うちの前に住んでいた子だよ」顔は覚えている？。

「名前覚えている？」「なんていったかな～」じゃあ、この子は？

「名前は忘れちゃったけど～。引っ越しの時、腕輪もらったんだ。」これも覚えていたね。

では、ラーメンは？

「ガレージセールの後、みんなで食べたラーメン。おいしかったなあ」

* * * * *

実験の結果、楽しい記憶を残せることはわかった。幼児の時の記憶でも引き出し続ければ残るのだ。「記憶」と「記憶を引き出す回路」は使い続けることによって、保持されるということだ。嬉しかった（強い感情を伴った）経験は記憶に残りやすいということもわかった。（ラーメンは母親のつくるものより相当においしかったらしい。）また、顔（画像記憶）は記憶に残るが名前（文字記憶）は残りにくいようだ。「顔は覚えているんだけどな～」ということがしばしばあった。記憶に使う脳細胞の量の違いなのだろうか。

引き出さなければ、記憶は消えていく（薄れていく）。思い出として残したいものは、引き出す行動が必要なのだ。写真を見る、そのときの話をするなど。だから、写真を認識する力や、記憶の内容をことばで表現したり聞き取ったりする力がともなっていないと、引き出すことは難しい。2歳だからできない、2歳半になったらできるというということではなく、その子どもの成長の状態によるということだ。

（息子の場合は、娘が2歳半の時の域に達したのは3歳の後半だった。）

さて、楽しい記憶が残せることは明らかになったが、結局のところ、夫は子どもたちをディズニーランドには連れて行かなかった。（近場の豊島園や西武遊園地には何回か連れて行ったが）行かなかったというより、仕事が忙しくなってなかなかその時間が取れなかったのだ。そのうち、子どもたちは自分たちで、友達と一緒にいくようになった。夫は、ディズニーランドに行きそこなってしまった。

2013年6月

どうしてもディズニーランドに行きたいと夫が言い張るので、夫の誕生日（6/4）にディズニーランドに行く計画を立て、そのことを娘に話すと、「お母さんたちが行くならディズニーシーがいいよ」と言って、切符の手配から、アトラクションやショーの選択、レストランの手配まで、何から何までアレンジしてくれて、場内案内までしてくれた。

「いつの間にか、面倒みられるようになっちゃったね。」
楽しくも、感慨深い1日だった。

矢口みどり（2015年10月）